

日本エッセイスト・クラブ

2018 冬

NO.70-II

會報

第8回応募エッセー特集



第66回 日本エッセイスト・クラブ賞受賞!

AI VS.

教科書が読めない 子どもたち



本体1500円

教育
関係者、
親たちに
衝撃!

大学生も、大人も!
中高生の「読む力」が危ない!



「東ロボくん」プロジェクト、「リーディングスキルテスト」研究開発を主導
気鋭の数学者が描き出す

AIの限界と 教育の危機

国立情報学研究所教授 同社会共有知研究センター長 新井紀子 著

東洋経済新報社

〒103-8345 東京都中央区日本橋本石町1-2-1 ☎ 03(5605)7021
<https://toyokeizai.net>

日本エッセイスト・クラブ

會報

2018 冬

題字 阿部 眞之助
表紙 よしだみどり
カット

目次

応募エッセー特集

2

〔例会〕

童謡百年―野口雨情の生家を尋ねて

秋田

博

34

会員近況

36

自著紹介

37

事務局から

38

日本エッセイスト・クラブ定款

40

会員名

42

応募エッセー特集

今夏、広く会員の皆さまのエッセーを募集したところ、十二編の作品が寄せられました。会員のエッセー募集は、当クラブ創設六十周年記念で初めて行われて以来、今年で八回目です。本会報には、今回応募の全作品を掲載します。

題名

筆者（五十音順）

秋山よし、九六歳。しっかり生きました。

秋山 秀一

木曾路の旅

岡 佳津子

あの頃のこと

加藤 恭子

日本語大クライシス

河口 鴻三

ある先生の言葉

今野 耕作

名前の由来と善因縁

紺野 猷邦

「薔薇香處」の思い出

武本 宏一

神田川に沿って

戸田 桂太

NHKドラマ「返還交渉人」の映画化

当銘 貞夫

夏は梅干作り

徳田 正幸

義父母を、たどって

並木きょう子

棄老と不老不死

広井 忠男

秋山よし、九六歳。 しつかり生きました。

秋山 秀一

という、かすかな声。

「お袋大丈夫か」

「気持ち悪い」

それが、お袋との最後の会話になった。二〇一七年一〇月二一日の深夜のことである。大正一〇年七月二一日の生まれ、九六歳だった。

生前、お袋は、「体はどこも悪くない。悪いのはこの足だけ。歩けなくなったら、どうしよう。それだけ、考えちゃうよ」と、言っていた。

亡くなるその当日の朝も、普段通り、起きるとすぐ、寝巻姿のまま、自己流の健康維持体操をしていた。

まずは、布団の中で、足首をもって、ぐるぐる回す。次に、寝たまま、足を片方ずつ上げる。そのまま、腰を左右にひねる。その後、立ち上がって、支えにつかまっつて、足踏み。さらに、椅子に腰かけ、片方ずつ、ゆっくり足を上げる。

お袋は、以前はよく、市内を歩いていたが、「この一年で、ずいぶん、足が弱くなっちゃったよ」と、九〇歳の半ばを過ぎてから、弱音を吐くようになった。

それでも、天気の良い日を除いて毎日、午後

「秀ちゃん…」

帰宅して、二階に上がると、下から、小さな声が出た。気のせいかな、とも思ったが、気になって、階段を降りて、風呂の脱衣場へ行くと、うつぶせになった、お袋の姿がそこに。

「立てないよ」

の三時すぎになると、近所のスーパーまで、「買うもんなくても、店内、ぐるっと、歩いてくるの」と言つて、一人で家を出た。そして、割引になったものを見つけては、毎回、何か、買ってきた。

食べることも、元気だった。

特に好きなものは、寿司。その中でも、エビが大好物だった。そのほか、ウナギ、牛丼、エビの入ったハンバーグ、カルビ焼肉定食…、なんでも食べた。ぼくが買つてくると、どれも、「これ、美味しい。美味しい」と言つて、目を細めて、食べていた。ほどほどで残し、「後は、明日の朝食べる」と言い、「私は、今、幸せだよ」と、笑顔で言うのを、何度も聞いた。

頭も、しっかりしていた。

新聞は、隅から隅まで、毎日読んでいた。昭和でも、平成でも、何年生まれ、と言つと、直ぐに、その人の年齢をピタリとあてた。記憶力もしっかりしていて、昔の出来事がいつのことだったか、ぼくより覚えていた。電気の消し忘れを指摘されるのは、いつもぼくの方だった。

「字を忘れないように」と言つて、毎日、ご近

所の人や、昔の友達、歌手などの苗字をノートに書いていた。カラオケ、それに、塗り絵も、大好きで、週一度のデイサービスの日も、楽しみにしていた。

九三歳の誕生日に、色紙に「旅」という字を書いてもらった。

それ以後、九四歳、九五歳、九六歳、と、毎年誕生日に書いてもらつて、四枚目の、昨年書いてもらつたものが、最後となった。

お袋は、昭和二〇年三月一〇日の東京大空襲体験者。その体験談を動画に撮り、昨年の五月、ユーチューブで配信した。その後、二本増え、今、以下の三本の動画を見ることが出来る。「秋山よし 九五歳、東京大空襲を語る（二〇一七年五月一日）」「秋山よし 九五歳元気に生きてます（二〇一七年六月一五日）」「秋山よし 九六歳になりました（二〇一七年七月二〇日）」。

実は、事前に死を予期して撮ったわけではないが、亡くなる前日に、朝の体操をしている姿を動画に撮っていたのだ。それに、塗り絵をしているところ、字を書いているところも動画に撮った。今、普段の元気な姿が映っているその

動画もユーチューブで見ることができると。

木更津に生まれ、東京の下町で東京大空襲を体験し、九六年の人生の後半の四〇年を鎌ヶ谷の地で、ごく普通に暮らし、見事に、立派に生きた人生だった。四年前に亡くなった親父とは違つて…。

木曾路の旅

岡 佳津子

あきやま・しゅういち 旅行作家。一九五〇

年東京都生まれ。東京教育大学（現・筑波大学）

大学院修了後、東京成徳大学教授等を経て取

材・執筆に専念。これまでに訪れた国と地域は

九〇カ所以上、海外渡航歴は二〇〇回を超える。

千葉県鎌ヶ谷市在住。

「信州に行きたいのだけれどプランを立ててくたさらない？」

と言われた。すぐ「木曾はすべて山の中」を思い浮かべる。塩尻から特急で一つめ、木曾福島で降りた。すでに周りは山の中だった。ここは木曾義仲との縁も深い。『平家物語』の巴御前の台詞「首振り切つて捨ててんげり」を思い浮かべる、会つてみたかと思ふ。

福島関所は箱根と共に四大関所で、「入り鉄砲、出女」に厳しく、男姿に変装しているかもしれないと、素裸にして吟味したとか。

宿泊予定の奈良井宿に向かった。表通りは昔ながらの家並みを保存しているので、電柱、街灯はまったくない。駅近くの真つ赤な奈良井大橋は総檜造り、橋脚のない美しい橋。河原には

コスモスが咲き乱れている。夜はライトアップされると聞いて、

「夕飯を終えたら見に来てもいいね」と話したのだが、夜になると、肝試しにもならないほど真っ暗で外出はやめた。

宿泊は「御宿伊勢屋」と言つて江戸時代から続く旅籠である。広い土間、高い天井、太い黒光りする梁。表通りに面し千本格子がはまつて街道を見下ろせる。

食事処にいたフィンランドからの団体観光客は、鳥居峠を越えて歩くのだそうだ。

翌朝、奈良井のはずれ、峠の近くの鎮守さままで行つた。神社の脇にはこんこんと湧く水場がある。峠をやつと超えてきた旅人が喉を潤し、一息入れたのだろう。皇女和宮さまもお休みになつた宿場だから、この水もお飲みになつたのかと想像した。

この神社脇で、山に向かう旧道と緩やかな広い道に分かれる。昨夜同宿の団体さんは重いリュックを背負つて細い山道へと向かつたので手を振つて見送つた。

駅へと引き返しながら黄楊櫛を売る店を覗

く。朝になるとが街道に面した葎戸を揚げて店を開き、上客は帳場脇の箱階段を登つて二階に引き、上等な部屋で上質なおもてなしをしたそう。その様子を想像してみた。

寄り道の一つ臨濟宗の大宝寺で首のないマリア観音に出会つた。この辺りには隠れキリシタンがいたらしい。そういえば、代官屋敷脇の高札に「バテレンをチクつた者には褒美をとらせる」と出ていた。列車は一時間に一本。時間に制約されながらの町歩きである。

この楽しい旅が木曾の北寄りの半分だったのが残念で、次の年の春、同じメンバーで木曾路の残りの南半分を巡る。名古屋経由、中津川に乗り換えバスで馬籠宿に入った。

「馬籠宿、江戸に八十里、京に五十二里」という標識の前では、日本人よりはるかに多い外国人観光客が、スマホ片手に位置確認中。この標識から旅籠を抜けて馬籠峠までは、すべてが石畳、急な坂である。宿場町に入つてすぐ、大きな水車が回っている。豊富な水量とこの坂のおかげで、この小屋で必要な電力は賄える。

私たちが泊まる「馬籠茶屋」は坂の半分の所、

荷物を預けて峠近くまで目指す。途中、本陣、脇本陣、藤村記念館、正岡子規石碑、十返舎一九の狂歌碑、山口誓子の碑などが並んでいる、一足ごとに文学の世界に入っていく感じがする。すべての人の心を捉える何かがあるのだろう。

宿泊した「馬籠茶屋」はゲストハウスと看板が出ていて、九割が外国人。夕食に出たイワナの塩焼き、山菜の天麩羅、具たくさんの味噌汁、などお箸を使って上手に食べている。部屋の中の家内も英語が日本語より先に書いてあるのは苦笑した。

峠を超えて次の宿場まで荷物の運搬サービスも整っていて、外国人たちは身軽に峠を歩いて越えていくようだ。私たちは「とても、とても」と遠慮してバスに乗る。

木曾路の旅で唯一の心残り、檜で作った一人用の小さなお櫃を買ってこなかったことだ。「レンジでチン」できるといふ優れたものに……。

おか・かつこ 一九三二年広島県呉市生まれ。
五五年東京女子大学文学部卒業。すぐ結婚。カ

ルチャーセンターで主婦の趣味で始めたエッセイ歴四十年。読売、西武のカルチャーでシニアのためのエッセイ教室講師。著書に『喜寿は輝寿』『八十四の身一つ』他七冊。

あの頃のこと

加藤 恭子

若い人たちと話していると、日本の過去を知らない事実には驚かされることがある。

「日本とアメリカは、戦争をしたって、祖母が言っていました。今はこんなに仲がいいのに……」と、ある四十代の女性。

昭和四年に生まれた私たちの世代は、小学校六年の時に日米開戦。女学生になると、それぞれの工場へ配属され、戦場で使用する物を作った。日本女子大附属高女の生徒だった私は、小石川の印刷工場で砲弾作りをした。

「お国のために……」と、級友たちと、毎日懸命に働いた。

小石川は私の家からは近かったけれど、遠くから通ってくる生徒たちもいた。電車の本数も少なくなり、ぎゅうぎゅうの乗客たちの中で、身動きもとれない。食糧も、配給制になった。

日本軍が敗北しつつあるのではないだろうか……などという感想は、誰ひとりとして口にはしなかった。むしろ、「勝つわよ！ きつと勝つわよ！」と声をかけ合っていた。

だが、東京への空襲もはじまった。一人、また一人、クラスから抜け、地方へ家族とともに疎開して行った。

「あの方も……」

と、残された私たちは、淋しそうに呟いたものだった。

私の家は、三宅坂にあった。

皇居のお壕のとなりが、陸軍省。細い坂道へだてて、私の家があった。江戸時代の大名屋敷で、大門の脇には小門が左右に一つずつ。大門の右側の塀には、仲間長屋が組み込まれていた。陸軍省との間の細い道を上って行くと、国会議事堂の左側面前の道路に出た。

アメリカ軍の側から考えると、最も破壊したのは、陸軍省ではないだろうか？ とすると、私の家も非常にあぶない。

父・藤井百太郎は早く死去し、母はひどく忙しく、お手伝いたちに囲まれて私は育った。田舎からのお手伝いたちは、一人一人田舎から声がかかり、そちらでそれぞれの工場で働くために帰って行った。ばあやだけが、残った。

母は私とばあやだけでなく、二人の弟たちも使って、重要な品物や家具を荷造りした。葉山に近い秋谷と、信州の湯田中に近い二つの別荘へ送るためだった。

「重要な品物」の中には、皇室からの御下賜品

の他に、ヒットラーとムツソリーニからのプレゼントもあった。

日独伊三国同盟が結ばれた時、父はそれをよろこんだ。他の方たちと一緒に、祝賀会を日比谷公会堂で開いた。そして、彼ら二人に、日本刀と羽子板をプレゼントしたのだ。

ドイツ大使とイタリア大使が代りに出席し、私は着物を着て、羽子板をムツソリーニへと、イタリア大使に舞台上で渡した。

あとで、ヒットラーからは御札の手紙と、金色の菓子皿、ムツソリーニからは手紙と、本人の署名入りのガラスケースに入った肖像写真が送られてきた。

それからほんの何年か後に、父は死去した。彼はフランスからは「文化功労章」をもらっていたのだが、生きていたら、あの戦争をどう言っただろうかと、私はときどき考えてしまう。

当時のドイツ大使館は、家から一、二軒先にあった。それよりも少し遠いが、英国大使館も近くで、大使夫人と御子息が、ときどきお昼の食事を一緒にするためにこられた。私も着物を着て、ご一緒に頂いた。アメリカ人には、会

ったことがなかった。

今から考えてみると、どうしてあんな戦争を、日本はしたのだろう？ いや、日本だけが悪いのではない。責任は、関係した多くの国々の指導者たちにある。

それによって、どれだけの人間の命、そして財宝が失われたか？ 参戦した国々の人たちも、(自分たちも悪かった……)と考えているのだろうか？ いつか、訊ねてみよう。

かとう・きょうこ 東京生まれ。早大仏文学卒。ワシントン大学修士号。滞仏米十五年。専門はフランス中世文学。上智大で教鞭をとり、定年後、同大などで「書き方」講座の講師を続けていく。『日本を愛した科学者 スタンレー・ベネットの生涯』(ジャパントイムズ)で第43回日本エッセイスト・クラブ賞受賞。おもな著書に『伴侶の死』(春秋社 文春文庫)、『私は日本のことが好き!』(編著 出窓社)、『言葉で戦う技術』(文藝春秋)、『歳のことなど忘れなさい。』(出版芸術社) など多数。

日本語大クライシス

河口 鴻三

日本語の乱れが目に見える。
テレビや新聞の電子版には、変換ミスが平気で放置されている。「住宅全勝、住人遺体で発見」とニュースの見出しにある。住宅と住人が何かで対戦し、住宅がすべて勝ったというニュースなのか。記事を読んでみると、「住宅全焼、住人遺体で発見」だった。

子どもの名前も、いまやメチャクチャである。光宙、七音、一心、紗音瑠。驚いたことに、これらは、「ぴかちゅう」、「どれみ」、「ぴゅあ」、「しゃねる」と読むのだそう。もうルールも何もあったものではない。

しかしもっと深刻な問題は、コンピュータ（スマホ）を使って日本語を書く仕組みの、あまりの停滞ぶりにある。

ほぼ四十年前に、だれでも買える程度の値段の日本語ワープロが商品化された。そこまではいいのだが、ローマ字かカナで入力して、漢字仮名交じり文に変えていくという方法は、その後ほとんど進化していない。

この過程自体を変える必要がある。
京都の寺で、「ここで履物を脱いでください」と、注意書きを張り出そうとしたら、出てきた文章は、

「ここでは着物を脱いでください」
寺で裸になれというのか！

こういう変換ミスはしょっちゅう起こる。

ところが外国人用に、「Take off your shoes here.」と英語で書くと、「発でOK。」

英語だと、なぜミスが起こりにくいのか？
理由はじつに簡単である。

英語では、単語と単語の間には必ずアキを入れる。コンピュータが、個々の単語を認識するのは、いとも簡単だ。

一方日本語は、長い文章でも、「アキを入れないで書く習慣」がある。これがデジタル時代に、非常に大きな混乱を生じさせている。

「あきをいれないでかくしゅうかん」

と入力されると、コンピュータは、そもそもどこからどこまでが一つの単語か、判別するところから始めなければならぬ。

「秋を」なのか「あきをい」なのか。あるいは「気を」なのか。さらに「でかく」なのか「で書く」なのか。あらゆる可能性を演算しなくてはならない

しかし英語風に、

「あきを いれないで かく しゅうかん」

と少しアキを入れれば、自然言語処理に必要な品詞の特定、構文特定がスムーズになり、負荷は何百分の一以下に減る。

アキを入れる書き方を「分かち書き」という。

英語ではこの分かち書きを自然にやるから、コンピュータで処理しやすい。先の英文も、

Takeoff your shoes here.

と、アキなしで入力されたら、コンピュータもお手上げだ。そりやそうだと誰もが笑うだろう。しかし、われわれは日本語を書くとき、何も考えずにこれをやっている。コンピュータに負荷をかけ、自身イライラする。賢明な方法とはいえない。

古来日本語でも、かなが長く続くときには微妙にアキを入れていた。この雅な文化が、活字印刷でびっしり文字を埋めるのが当たり前になり、消滅してしまった。この伝統をデジタル時代に復活させる必要がある。

学校教育でも、こうした考え方を取り入れて、国語枠の中に、「日本語入力」の内容を入れる必要がある。自然言語処理の専門家たちも、分かち書きが日本語作成の精度を飛躍的に上げることを、世間にアピールすべきである。

もともと日本語に句読点はなかったが、これでは不便だということで、政府は明治三十九年に「句読法案」を作って、句読点の使用を奨励、普

及させたという歴史がある。いま必要なのは「アキ」である。

入力だけでなく、出力された文章にも、もつと句読点やアキを増やしたい。幸い日本語は2バイト文字だから、1バイト（半角）の空白を入れることで、さりげなく日本の分かち書き文化を復活できる。もともとキーボードは英語用に出来ているが、そこに半角アキ用のキーを加えるだけでいい。

デジタル的に、日本語は石器時代の段階にあるといっても過言ではない。デジタル先進言語の欧米にどんどん差を広げられる。国家的課題である。

日本語大クライシス。

何とかしなくてははいけない。

かわぐち・こうぞう 1947年山梨県生まれ

一橋大学社会学部卒、スタンフォード大学ジャーナリズム学科修士課程修了。元講談社。

日本で「知的生活の方法」など担当後、NYで

英語の出版に十一年間従事。ドプチェク回想録、

オバマ自伝など二百四十点を刊行した珍種の編

集者。近年は、デジタル時代に日本語がまったく対応できていないことを憂慮。「仕事を高めるデジタル文章術」（日経新聞出版）などで警鐘を鳴らしている。

ある先生の言葉

今野 耕作

七十代になった頃から、毎朝、「有難う」と心の中で挨拶をする先生がいる。大学時代に第二

外国語を教えていただいたドイツ語の浜中先生だ。学生時代には、特に慕った先生でもなかった。老年になって急に先生の言葉がよみがえって来たのが不思議でならない。

先生の思い出は、大学卒業後、先輩たちの話で深まった。先輩たちの話によると、先生は旧制浦和高校の名物教授だったそう。その熱血授業は、先輩に会うたびに話題になった。これが新制の埼玉大学時代になっても、変わらなかった。何かにつけて、旧制一高（現在の東大）と比較し、ドイツ語だけは本校の授業は日本一だ、レベルが違う、質が違うと豪語し、テキストもやさしくなかった。

試験も厳しかった。「東大は辞書の持ち込みを許すが、本校は辞書なしだ」と念を押し、ほとんどの学生を赤点にした。生徒からのクレームには、追試で救う手口だったが、なぜか生徒からもあまり嫌われない人間性を持っていた。

先輩たちはこの先生を慕う人が多く、「相変わらず、浜中節は健在だったのかね」と問われることが多かった。特に、旧制浦和高校から、東大の医学部に進んだ先輩たちは、必ずこの言葉

をかけてきた。

話を聞くと、テキストが当時のものと同じなのだ。南ドイツの開業医で詩人で作家のハンズ・カロツサの自叙伝「若き医師の日」や「幼年時代」を読まされたのだ。カロツサはカフカから文壇の地位を奪われた人だが、第一回のゲーテ賞を受賞され、一時代を飾った作家だ。

先生は、授業中、その作品のすばらしさ、文体の美しさに惚れ惚れし、「日本語に訳したとしても「いたいまい」などと口走って、音読みを大切にしたい。それが浜中節といわれる以前からの授業スタイルだったらしい。

医学の道を選んだ方々は、「カロツサの作品は、現代の聖書だよ」という人が多く、社会人になってからは、医師の日々を綴ったエッセイ集は、心のバイブルになったのだという。そんなカロツサの作品と、浜中先生の人間性が重なり、青春時代の思い出になってしまったのかもしれない。

その浜中先生は、カロツサのほかに、オーストリア文学者のグリル・パルツァーという作家の「哀れな辻音楽師」をテキストにした。

老年になり仕事を失い、迷いにまよった音楽家は、自負心を捨てずに、見栄を捨てる自活の道を選ぶのだった。午前中はヴァイオリンの基礎練習に情熱を傾け、午後からは物乞いのような辻音楽師となり安らかな心で死んでゆく物語である。

この授業で、浜中先生は、くどいように繰り返した。「人生は晩年の生き方で決まる。人生は最後まで学び続けて、自活し続けるのだ」と。そしてまた、繰り返した。「最高峰の文学には、幸せを呼ぶ祈りがある。君たちは、この文学に会えた幸せ者だ」と。

この言葉が、ある朝、よみがえったのだ。書棚には捨てずにいたこのテキストが残っているが、もう原文で読むことはできない。今は、学生時代のややあいまいな記憶と先生の言葉が心の糧になっている。

それはそれでいいのだろう。いつまで頑張れるかどうか分らないが、今のところ、朝から学び続けられる楽しさにささやかな満足感を得ている。故人になられた短歌の師に、こんな歌がある。

七十から人間は花開くなりとたまさか聞きて
われもたのものし
野村 清

こんの・こうさく 1939年生まれ。埼玉
大学卒。元京王電鉄取締役、元埼玉大学特任教
授・理事。現在府中市生涯学習センター講師(万
葉集・エッセイ・筆ペン)



名前の由来と善因縁

紺野 猷邦

「このお名前、何とお読みするのでしょうか」
「猷邦（ゆうほう）」と読みます」初対面の方と名刺交換する際こんな挨拶から始まるケースがよくある。名前の由来は昭和十六年十二月八日の開戦の詔勅にある「遠猷ニシテ」と「萬邦共榮ノ樂ヲ偕ニスルハ」の猷と邦を組み合わせて、父が命名したものである。生まれた日が、破竹

の勢いで進軍を続けていた開戦の翌年で、しかも陸軍記念日の三月十日であったことから、父としては勇躍、決断したものと思われる。「遠猷」とは、東亜の安定を確保し、以って世界の平和に寄与するという「遠大なはかりごと」という意味であり、「萬邦共榮の樂しみをともにする」は、当時の我が帝国の外交の要とされていた。読み方だけではなく、その意味もよく質問された。その都度、国をはかるのだから the head of stateだと説明すると、失笑を買うことしばしばであった。珍しい名前だけに、JFOと読み間違えられたり、その読み方、書き方については「嘶」のネタになりそうな実話は枚挙にいとまがない。これらについては、また別な機会に譲ることに致したい。私自身、終戦は三歳の時、仙台で迎えた。戦時中の話は、親や姉兄の話聞きながら断片的にイメージできる程度で、これは戦中生まれに限界でもある。しかし、自宅裏の畑の傍に掘られた防空壕の土の匂いだけは、今でも忘れることはない。

さて、時は流れ昭和六十年十二月、香港のアジア・オセアニア地区支配人室への赴任を皮切

りに、ここから十数年間にわたり、アジアにかかわる仕事に携わることとなった。中国・韓国をはじめとする十二か国十五支店を管轄する地区支配人室への着任に際し、まず考えたことは、先の戦争にかかわる「負の遺産」を常に胸に秘めながら、アジアとの和解と信頼関係を確かなものにしていくべきということであった。当時、

アジアの国々には依然として潜在的な反日感情がくすぶっており、それだけに、日本は、日本人はアジアの国々からどう見られているのか、何を期待されているのかを真剣に考える絶好の機会でもあった。また、実務の遂行にあたっては、日本の考え方やり方に固執することなく、それぞれの国の法律・社会制度・生活慣習・慣行などを尊重しながら対応すべきとの考えで臨むことにした。戦前、台湾の民政局長であった後藤新平によるこの「旧慣尊重」という考え方は、時代を越えて通用する「共生」の鉄則であり、自文化中心主義では現地社員との価値観の共有及び意思の統一に限界が生ずることは必定と考えたからである。ここにきて、命名時の「遠猷ニシテ」の実質的意味は、当時の植民地支配・

侵略容認から百八十度反転し、アジアとの和合と共生の追求に大きく転換することとなった。時代の変化に伴うこの「善因縁」への転換は、時勢の流れの変化に一家言を持つ父も、きつと納得してくれていると思われる。

先日、偶然に「猷輔」という名前に出会った。磯田道史著の「無私の日本人」（文春文庫）に登場する大田垣蓮月の弟子で、のちの文人画家・富岡鉄斎の少年時代の名が「猷輔」であった。普段は優しい蓮月も、少年が風邪などを引いた時には、うって変わって厳しい顔になり、「猷さん。命は大切にせねばいけません。長生きをして、世のため、人のためになるべきことを、なるべきようにして、心静かに気長にくらさねばなりません」と叱ったという。戦後の長きにわたる平和な歳月に思いを致すとき、戦争の記憶をうまく語れない戦中生まれの子供後派であっても、先の大戦の不条理を風化させることなく、東亜の安定と世界の平和の今日の意味を考え、汗を流していくべきではないかと考える。猷輔に対する蓮月の厳しい諫言をかみしめながら、これからも「善因縁」への転換を、より確

かなものにするべく、アジアで出会った人々との人間模様を中心に、その心象風景を次世代に語り継ぎ、書き残していきたいと考えている。

こんの・ゆうほう 1942年東京生まれ。

65年東北大学法学部卒業、日本航空入社。アジア・オセアニア地区支配人室（香港）勤務を経て、ソウル支店長、ジャカルタ支店長、AASケータリング代表取締役、ジャルウェイズ常勤顧問などを歴任。現在はディレクトフオース会員、札幌商工会議所会員、CLD Labo 特別顧問。著作に「日本再発見紀行」（共著・文芸社）、「ホスピタリティとホスピタリティマネジメント」（共著・パレードブックス）、「現場指揮官の危機管理」（連載コラム・NNA）などがある。

「薔薇香處」の思い出

武本 宏一

最近どうも、昨日まで書けていた漢字が思い出せず、手紙一つ書くにもつい、ワープロのお世話になることが多くなった。

そこで私は毎日ノートの上に、好きな漢字、それも字画が多かったりして思い出すのに苦労するような漢字を書いて、脳の老化をくい止める努力をしている。

たとえば、「蟋蟀」(こおろぎ)。

たとえば、「檸檬」(レモン)。

そうしてもう一つ、私の大好きな漢字と云えば、「薔薇」(バラ)である。

昔、私のテレビ番組に主演してくれたマイク真木さんのデビュー曲は、「バラが咲いた」。

フォークソングには、片仮名の「バラ」が、よく似合っていた。

一方、ウンベルト・エーコの重厚なミステリーの題名は、やはり漢字での「薔薇の名前」以外には考えられない。

もう10年も前のことだが、私はある月刊美術誌のページをめくっている内に、ハタとある一点に目を惹かれた。

それは、掛軸に装丁された書で、「薔薇香處」の四文字であった。



副島種臣筆
(致道博物館蔵)

この「薔薇」二文字の流麗さには、心が釘づけにされた。

それはもう、文字というよりは、あの鋭い棘を隠し持ちながらも微笑をたたえて見る者を轟惑する、完璧な姿態の「バラそのもの」で、私は震えるほどの感動を覚えた。

この書は、美術誌によれば、明治の元勲の一人、副島種臣の筆に成るもので、現在は山形県鶴岡市の致道博物館に保存されている、という。私は、是非ともこの眼で薔薇香處の実物にしかと対面したくなり、矢も楯もたまらず旅の人となった。

鶴岡といえば、藤沢周平がその作品の中で、「海坂藩」として度々登場させている街。

致道博物館は、鶴岡公園のそばに静かな佇まいを見せる洋館の中にあつた。元、鶴岡城の三の丸の辺りだという。

あらかじめ私は同館に電話を入れ、副島の書を見せて頂くようお願いしていたのだが、到着して係の方に案内された一室に入ると、予期せぬ驚きが私を出迎えてくれた。

その一室には壁一面に、黒々と骨太に書かれた様々な書が、ぎっしりと掲げられていた。それも何故か明治の元勳たちの書が多いようだったが、先ず目に入ったのは、西郷どん……あの西郷隆盛の書である。

聞けば、この地と鹿児島とは、ある深い関係で結ばれていた。

それは、かの戊辰戦争の時だが、ここ鶴岡の庄内藩は、奥羽連合の一国として、明治の新政府軍と戦った。そして、敗れた庄内藩は、当然過酷な重罰を受けるものと覚悟していたところ、西郷の温情があり、さしたる処罰も受けずに済んだ。

これに感激した庄内藩々主（酒井家）が、その後も家老や藩士たちを鹿児島に派遣し、南洲訓話を学ばせたり、また鶴岡に「敬天愛人碑」をつくったり、交流が行われたのだという。

さて、その西郷が私淑していたのが、ほかならぬ佐賀七賢人（大隈重信ほか）の一人、副島種臣だった。

副島はその後、新政府の外務卿に任ぜられ、清国との外交交渉に功績をあげたりしたが、そ

の一方旅を愛する自由人であり、また書でも天才を発揮した人だった。

こうした縁があつて、副島は明治21年に鶴岡を訪れ、滞在中庄内藩士らに詩経を講じたり、多くの書も残したということである。

過ぎし日を偲びつつ、私は部屋の中央に進み、遂に憧れの書

「薔薇香處」

と対面した。書の大群の中で、ここだけは明るいそよ風の吹く、別次元の空間だった。忘れ得ぬ一瞬だ。

いま、秋めいてきた我家の庭に、あの今夏の猛暑を生き抜いた紅いバラが咲き出している。

日記には、あの書との対面の感動を思い出しつつ、今日、「薔薇」が咲いた、と書いておくことにしよう。

たけもと・こういち 昭和12年生まれ。東京

大学文学部英文科卒。36年、TBS東京放送入

社。ラジオ深夜番組「バック・イン・ミュージック」の企画制作など。45年、日本初の番組制

作会社テレビマンユニオン創立に参加。以後「遠くへ行きたい」（日本テレビ）の演出、「世界の車窓から」（テレビ朝日）の制作指揮などに当る。現在、関東民放クラブ顧問。

神田川に沿って

戸田 桂太

歌川広重最晩年の傑作浮世絵、『名所江戸百景』には、隅田川に関連した情景・風俗を描い

た絵が多い。さすが「大川」が江戸の暮らしや文化の中心だったと想像できるが、全百十九景のひとつに「昌平橋聖堂神田川」と題された一景もある。

画面の下の端に橋の欄干が僅かに描かれていて、これが昌平橋か。そこから眺めた湯島の聖堂と神田川の情景がはるか上空の架空の視点から俯瞰されている。川筋はゆるやかに左に曲がっており、このカーブの具合は現在の神田川の流れと、ほぼ同じだと気付かされる。聖堂の手前の坂道には歩く人びとの姿も見え、対岸のひとときわ高くそそり立つ崖には枝振りの良い松の木が立っている。現在、聖橋やJR御茶ノ水駅のホームがあるあたりだろうか。

江戸時代の始めに大都市江戸の飲料水確保のための大規模な河川開削工事があり、神田山（本郷台地）を切り開いて駿河台と湯島台にはさまれた谷間に水を通した。伊達藩が工事を担ったので仙台堀ともいう。

現在、御茶ノ水駅付近には樹木の生い茂った深い溪谷が出現し、谷の底を流れる神田川の横を何本もの電車の線路が走る景観には目を見張

らされる。世界の大都市の風景として、他には類を見ないものだろう。その同じ場所が江戸末期の広重の時代にも名所図会として取り上げられていたというのもおもしろい。

神田川は井の頭公園の弁天池の湧水を水源として、善福寺川、妙正寺川などと合流しながら、東京都区内を東に向かって流れ、台東区柳橋のあたりで隅田川に注ぐ。東から西に向かって進んだ東京の街の発展に逆らうように、大都会の真っ只中を東向きに流れるが、全長二四・六キロの流域に暗渠の部分は全くない。この規模の都市河川では極めて珍しいことだという。

『名所江戸百景』には「井の頭の池弁天の杜」も選ばれている。神田上水（神田川）の水源は江戸の名所に数えられていたのだろう。

その井の頭池を出ると、京王電鉄井の頭線沿いに杉並区内を流れ、中野区境の和田一丁目付近で善福寺川と合流する。その後、中野区内を北上して新宿区の西武新宿線下落合駅付近で直角に右折して東に向かい、中野区内を蛇行してきた妙正寺川と合流する。明治通りの高戸橋からはその合流点がよく見える。

東京にも、隅田川や多摩川などの大きな川のほかに、神田川のような中小河川はたくさんある。以前は大雨の度にあちこちの川があふれて、流域の家や道路に被害が出たものだったが、河川改修が進み、調整池が整備されて、都内の水害の噂も久しく聞かない。しかし、近所の小さな川の氾濫こそが実は恐ろしい。

目黒区に蛇崩川という川がある（今は暗渠になったが）。「蛇崩れ」とは崖崩れのことと辞書にあり、この川の名は身近な川の決壊や氾濫への人びとの恐怖の記憶を伝えている。

さて、神田川である。妙正寺川と合流したあと、新宿区と豊島区、文京区との区境を東へ進む。流域の北側にはずっと台地が続いていて、川はその台地に沿って進む。このあたりは歴史的にも興味深い地域で、下落合駅から北へ坂を登ったあたりは徳川將軍家の御料地だったというし、「椿山荘」は誰だったか大名の下屋敷を、明治になって山県有朋が手に入れて自分の屋敷にしたものだという。以前は関口台や小日向台という町名もあったが、今は関口、小日向となつた。ただ、小学校や公園の名前には今も「台」

がついているし、「目白台」の町名は残っている。昔はこのあたりでは川は「江戸川」と呼ばれていた。一九六六年ごろ神田川に統一されたそうだが、「江戸川橋」の地名は昔の名残だろう。その江戸川橋からは首都高速道路が屋根のように川を覆うが、水道橋からはまた川面に空を映して、御茶ノ水の谷を経て隅田川に向かう。歴史といえば大ゲサだが、神田川に沿って、江戸から東京へと連なる暮らしの変化が垣間見えるようで興味は尽きない。

とだ・けいた 1940年東京生まれ。早稲田大学文学部仏文専攻卒業後NHK撮影部でドキュメンタリー番組のカメラマンとして勤務。NHKスペシャルなど多くの番組を担当した。その後NHK出版で『放送文化』誌編集長などを歴任。武蔵大学社会学部教授として映像論、メディア論などの講義と映像制作実習や映像表現の指導を担当した。

2009年に定年退職。
現在武蔵大学名誉教授。

NHKドラマ 「返還交渉人」の映画化

当銘 貞夫

千葉明ロサンゼルス総領事より、1972年の沖縄返還交渉に携わった父・千葉一夫氏（当時、外務省北米第一課長）を描いたNHKドラマ「返還交渉人」が映画化されるとのメールを頂いた。制作に当たった宮川徹志チーフ・ディレクターより、映画版の試写会が4月に東京で行われるので、以前千葉一夫氏について取材を

した琉球新報の方にも来場頂けないかとの内容であった。

宮川さんによれば、去年8月、NHKドラマとして放送した際、文化庁の芸術祭参加作品に撰ばれるなど好評を博したこともあり、今回、映画用に再編集して、全国の単館系の劇場で6月〜8月にかけて上映されることになったとのこと。東京ではポレポレ東中野、沖繩では桜坂劇場で上映されたようだ。映画版では、89分のドラマのためにカットしてしまったシーンや、細かな修正を加えるなど、いわゆる『ディレクターズカット版』となっているとのことであった。

事実に基づいた話を、小説やドラマ、映画にするのは難しいことだろう。例えば山崎豊子の「大地の子」上中下の全巻に「この作品は、多数の関係者を取材し、小説的に構成したもので、登場する人物、関係機関なども、すべて事実に基づいて再構成したフィクションである」とのことわりが書いてある。「返還交渉人」も、千葉夫妻と屋良朝苗以外の登場人物は名前を変えるなどフィクションの部分もあるが、千葉氏の沖

繩返還に心血を注いだ姿勢の背景には、強烈な戦争体験があったことなど、物語のエッセンスの部分で真実を描くことを意識したと、宮川さんは強調。ドラマや映画は視聴率、観客を集める意味である程度の娯楽性が必要だし、制作者としてはその点腐心するのではないだろうか。

上記のエッセーは「島人の目」として琉球新報に今年の4月16日に同題で掲載された私のコラムに多少手を加えて作成したものである。それから2週間後の4月30日にロサンゼルス近郊の隣接都市トーランスで「コミュニティへの橋渡し…日系企業と社会貢献」と題してパネル・ディスカッションがおこなわれた。パネリストは日本マイクrosoft平野拓也社長ほか3人の現地日系人起業家であった。司会はNHKロサンゼルス支局長飯田香織さんで、ディスカッション終了後私は飯田さんに面会を申し込んで、コラムのコピーを手渡した。飯田さんは「これは千葉明ロサンゼルス総領事のお父さんの物語ですよ」と応えた。

とうめ・さだお 沖繩県生まれ、地元の高校

卒業後東京に10年間在住、1969年の暮れにロサンゼルスに渡航、グレンデール・カレッジを卒業、カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校に編入、中退。アメリカ永住権を取得後、市民権を得て現在に至る。その間北米沖縄県人会

(ロサンゼルス)の会長、日本全国40県人会が所属する「南カリフォルニア県人会協議会」の会長を歴任。1998年以来沖縄で発行の琉球新報ロサンゼルス通信員となり、現在続行中、約1300の記事を書いた。

下三日三晩干すです。必要なものは梅の外に、諸道具、干すための場所、そして意欲。

夏は梅干作り

徳田 正幸

梅の里と呼ばれる田舎に生まれ育ち、分家して現在も住んでいる。農業の生家の主な生産物は、米とみかんだった。生家のある曾我村の一部は、一九五六(昭三一)年に、隣村の下曾我村はその二年前に小田原市と合併、「曾我梅林」はお城と共に今や小田原の顔です。「曾我の梅干」は、小田原・箱根の人気のみやげです。

温暖な小田原は、早い年には正月に梅が咲く。二月は梅まつり月です。

一九七〇(昭四五)年、梅まつりが始まった頃から、みかんの不振が決定的となり、転作が始まった。

夏は毎年梅干を作ります。手順は原料の梅を手に入れる。塩漬けにする。漬かった梅を晴天

広い畑はキウイフルーツにした所が多いが、

それが無理な所は梅に変わった。今や大木になったその梅も、手不足で放っておかれるようになる。

収穫すればもらえるので、二十年程前からだろうか、私の梅干作りが始まった。五十代に入っていた。梅干が健康に良いのは実感していたし、買えばけっこうな値であることも知りました。

梅干作りを見て育った。生家では家の食用だけで大量に作ってはいなかったのだろう、手伝った思い出はない。それでも始めてみて、困ることはほとんど無かった。

妻が協力的だったことも助かった。梅は落ちたものをためるか、手もぎして集めます。

今年は六月中旬の数日間、早朝の二、三時間、妻と二人で山の畑に梅もぎに行きました。剪定が行き届いていないため、私は木に登り、枝を切りながらもいだ。梅もぎの後、しばらく腕が痛みました。

やわらかい梅干を作るには、熟して落ちたものか、手もぎした青梅が黄色になるのを待つて

漬けます。四、五日か一週間はかかります。作り始めた頃はこれを知らず、青いまま漬けて堅いものを大量に作ったこともありました。

梅作りの間は、車庫が作業場となり、車は屋根のない所に置きます。梅作りの間は水仕事等が多く、手を傷つけないことが大切です。

重さを計り、桶に塩をまぶしながら詰めます。塩の量は梅の重さの十八パーセント。昔ながらの量で辛いという人が多いが変える気はありません。塩は少なめにまぶし、残ったものは梅の上へのせます。中蓋をし重しを乗せる。重しは自然石か、工業製品で五キロのものです。

一週間ほどで「水があがって」きて、梅は梅酢漬けとなります。六月二十日ごろまでには漬けて梅雨明けを待ちます。

立秋の前の一八日が夏の土用です。梅雨明けと重なる場合が多いので、「三日三晩の土用干し」を行います。梅雨明けが遅い年はいらつく。

「せいろう」と呼ぶ一辺六十センチの平たいざるに漬けた梅を広げます。やわらかなものは破れやすいので、ていねいに扱う。一日中日当り

の良い所がないので、午後はせいろうを移動する。雨にあてないよう気をつける。梅干の間は遠出は無理です。

夜も空の下がいらいらいが、雨が心配で縁側に移します。せいろうはかつては一度に十枚、今は七枚で何度か干します。初日が晴天なら二日目の朝までに、梅を一つ一つ裏返します。一枚に三十分近くはかかります。晴天三日でできあがり、四日目は梅の入れかえとなります。

せいろうには一枚約三・九キロの梅を干します。今年は延べ五八枚干したので、約二二六キロ作りました。

できた梅干は、私の判断でA、B、くずに分け、くずは家で食べます。

他は、知人・友人・きょうだい・なじみの店・老人ホーム等、あらゆる所へ、お礼、プレゼント、寄贈、中元、歳暮等の形で配ります。購入して下さる方もあります。

健康なうちは続けようと思います。

とくだ・まさゆき 1944年、神奈川県生

まれ。出版社・公立中学校勤務後退職。現在川柳教室講師。川柳きやり吟社社人。川柳人協会会員。小田原市在住。

義父母を、たどって

並木 きょう子

大きなおなかをバッグでかばうようにして、「行ってまいります」と、息子の妻が言う。「行ってらっしゃい」と、朝、いつも通りに送

りだすとき、私はとっさに、玄関にあった火打ち石を手にとって、彼女の背中に向けて打った。

火は、石から小気味よく、はねた。

明日から、産休に入る息子の妻。今日は大きなおなかをかかえて通勤するさいこの日だ。

まるでヤクザの出入りを送り出すみたいだと思っただが、満員電車での通勤は、おなかの子を守る、まさに戦いの毎日だったろう。

とっさの火打ち石の火は、勢いよく、清々しく、彼女の無事を守ってくれる気がした。

私も、働きながらの出産、子育ての頃をなつかしく思い出した。

若い頃、主婦向けの雑誌の編集部に11年間勤務したあと、長年、女性誌のフリーライターとして仕事をしてきた。

まだ20代の頃、早くから夫の親と同居したが、親孝行というより、共働きの子育てが行き詰まって、親の元に飛び込んだのが実情。

その頃、企業を定年退職した義父と義母は、これからが、人生のごほうびの黄金時代と思っていたに違いない。

それなのに、急に息子一家が赤ん坊連れで同

居してきて、孫育てが始まってしまった。

義父は、毎朝、出勤の私を見送りに、赤ん坊を抱いて、駅近くの踏み切りまで来てくれた。

私は、満員電車のドアのガラスにへばりつきながら、見つけやすいようにと、バンザイみたいに両手を上げて振った。義父も赤ん坊を片手で高々と持ち上げて、手を振ってくれた。

これが、私の毎朝の出勤儀式となった。

子が熱を出したときは、病院で順番を待つ私のところに、ねんねこでおんぶして、来てくれた義父。義母はずっとおいしい食事を作り続けてくれた。

同居生活というのは、始まってしまうと、24時間、365日開いているコンビニみたいなものである。つごうが悪いからと言って、一日も休業できない。三度の食事を共にし、会話をし、共に生きる。それから30年を越える同居生活になったが、義父母からは、苦情も小言も一度も聞かなかった。

私は、飛んでいる嫁だったから、今思うと、言いたいことは山ほどあっただろうに。

人間は、こんなにも人間を信頼してくれるの

かと思うような両親であった。どんなときも惜しみなく、子育てを助けてくれて、何ひとつ、見返りを求めなかった。

おかげで、私は細々とでも、仕事を続けることができた。

義父母の晩年、反対に手助けが必要になったとき、若い頃からさんざん世話をしてもらった私は、へこたれそうになりながらも、なんとかがんばった。ここで逃げだしたら、女がスタルと思つてがんばった。

どうしたら義父母が一番、心ほがらかに、心やすらかにいてもらえるのかを、いつも考えた。義母は84歳、義父は95歳で見送ったが、驚くほど健脚だった義父も、最晩年は、歩けなくなり、認知症にも。

日に日に表情がとぼしくなっていく義父に、ある日、思いついて、台所のカウンター越しに、小さなぬいぐるみを出して、「元氣ですかー？」と言ってみると、食卓にぼつんと座っていた義父が、思いがけず、目を輝かせて「ハイッ、元氣です」と手をあげた。

義父の心が少しの間でも、明るくなるのが嬉

しくて、それから、台所のカウンターの人形劇が始まり、私は複数の人形を使って熱演した。

やがて義父は、ほとんどベッドで横になる生活になった。

あるとき、ベッドの義父に、何か心配なことはないですかと聞いたことがある。心配なことがあれば、軽くしたいと思つて。義父は、小さな声で何かを言おうとしたので、耳を寄せると、「おなか、きょう子さんのおなか」と言った。私はその前年に腹部の手術をしたのを気づかってくれたのだった。義父の吐息のような言葉を理解したとたん、私はどつと涙があふれ、ぐしゃぐしゃの顔で、義父を抱きしめた。

「おとうさん、ありがとっ、ありがとっ」と。

火打ち石を打って送り出した次の日から産休に入った長男の妻は、その翌月、無事に出産。

赤ちゃんは、毎朝起きると30g大きくなって丸々としてきた。

抱っこしながら、私は毎日、思う。

どうか、この手が、この体が、義父母のように、次の世代を生きる子たちのために、そして

できれば、他の誰かのためにも、まだまだ使えますようにと。

そして、気づいた。義父母の生き方から、たくさんの愛を受けとり、そして今、私は、なぞり、たどっているのだと。

なみき・きょうこ 1948年東京生まれ。

国学院大学文学部卒業。主婦の友編集部記者11年を経て、フリーライターに。主に、女性と仕事をテーマに、人の生き方を描く人物ルポ、エッセイを執筆。著書に、エッセイ「ごちやませ同居行進曲」（主婦の友社刊・TBS系テレビでドラマ化）、人物ルポ「喝采―いま輝く明治・大正の女たち」、人物ルポ「人生き・ら・ら」（以上主婦の友社発売）、エッセイ「3000字の小さな幸せレシピ」（アップオン刊）。

棄老と不老不死

広井 忠男

長野県千曲市に講演で呼んで頂いた。演題は「蛭になって帰った特攻兵のドラマ」――。

二十歳の誕生日の翌日に特攻出撃を余儀なくされた新潟県出身の宮川三郎軍曹が「敵艦に体当たりしたら蛭になって帰って来る」と約束し、その夜一匹の源氏蛭が鹿児島県知覧町に実際に飛来した悲しい実話をスピーチさせて頂いた。

経営者達の会で講演を設営してくれた学友は周辺を案内してくれ、姥捨山伝説の姥が腰をかけて休んだ山があることを話してくれた。長野―松本を結ぶ篠ノ井線には姥捨駅がある。山国信州の姥捨伝説は昔からあった。

深沢七郎氏執筆の小説「檀山節考」出版と同名の映画化（田中絹代、田村高廣氏主演）で一躍有名になった。一定の年齢になった老母を酷寒の山中に置き去りにし、衰弱死、餓死の到来を諦観のもとに待つ棄老譚である。死肉を食らわんとする鳥達が粉雪を舞わして飛び騒ぐすさまじいシーンが忘れ難い。貧しかった時代、棄老は全国のあちこちにあったと聞く。信州では年寄りの知恵の大切さに気付いた殿様が姥捨てを中止させたとの話もある。これは民衆側の願望であったとも思われるが、実際に禁令を発したとしても隠れて棄老は行われたと推測できる。隣の山国、甲州にも棄老伝説は遺る。江戸中期に廻国放浪の作仏聖木喰五行（享和三年（文化十年））がいた。人生後半の五十六歳から三十七年間日本全国を巡錫し、一千体余の神仏像を彫刻した偉人である。大半が貧しい民衆に

無料で彫り与えたものである。足跡は道南の江差、熊石から鹿兒島にまで遺る。木喰は郷里の甲州西八代郡丸畑村にも四国堂他多くの彫仏をしている。その一つにマツコ堂なる祠堂があり三体の彫仏が立つ。マツコ堂の脇は棄老の坂落とし断崖である。この村では一定の年齢になった両親を子供がこの崖に突き落として往生をさせた。悲嘆にくれたであろうが、その行為は子孫を生き延びさせるための窮余の策であった。

たまに少し暮らし向きの楽な家があっても例外は許されない。村の掟、不文律であったと思われる。自分の実親を突き落すことにためらう息子がいた。真夜中に、村人に隠れ握り飯と水を運ぶ孝子である。死を覚悟しながらもその子を持った故に子を持つ、待つ子からマツコ堂となった説、末期の水を飲んで冥土に発ったマツゴからマツコ堂と称した二説がある。少年時代の木喰、伊藤（本姓）少年は、深夜に絶命する村の老人の悲鳴を聞いており、供養のために故郷に彫り置いたとも考えられる。生き続けることができないう棄老は切ない。一方死ぬことができないう不老不死も切ない。八百歳まで生きた（死

ぬことができない) 八百比丘尼伝説は日本中にある。新潟県寺泊町は日本海の鎌倉とも称されている。

不老不死の人魚の肉を食べたために八百歳まで生きた比丘尼の伝説がこの町にある。若さのまま年を経てゆくが死ねない。この間に何人も夫が他界して行つた。比丘尼の生家、旅館まつやは今も営業しており、比丘尼が家を出るときに植えたと伝わる老松が巨傘となつて立つ。

諸国を巡り若狭(若さ)の国の古刹空円寺の洞穴で入定したと伝説は生々しく語る。近年夏若狭小浜市の民俗行事、地藏盆他を見学に訪れた。古来大陸の中国、朝鮮半島との交流の拠点であり、北前船の重要寄港地であつた。宮廷に食物を届ける御食国(みけくに)であり、京都への鯖街道としても知られている。小浜藩主酒井家の菩提寺(市史蹟)でもある古刹空円寺には八百比丘尼石仏像と入定の洞穴が現存する。長者の姫はやはり人魚の肉を食し、若いまま死ぬことができない。諸国を巡り、道路開設、架橋、植林を指導し、民衆に人の倫を説き続けた。修行の末やつと空円寺の洞穴で入定(死去)することができた。

白樫の木を一本残して——。生きたくても子孫を生かすために死を余儀なくされた棄老も切ない。が死ぬことができない八百比丘尼伝説も後世の人間に多くの論しを与えている。

ひろい・ただお 早稲田大卒。第68代新潟県議会副議長。全国木喰研究会々長。著書に「虫になつた特攻兵へ(宮川三郎物語)」「野に生きる仏 木喰上人」「耐える鋼鉄 第三十六代横綱羽黒山物語」ほか。



候補作品ご推薦のお願い

来年2月に依頼状を発送

来年度の第六十七回日本エッセイスト・クラブ賞の審査基準は下記のとおりです。本年四月一日より来年三月末日までに、初版として発行された単行本が対象です。来年二月に、会員および出版社に推薦願いをお送りしますので、候補作のご推薦をお願いします。審査委員長は高村壽一氏です。

今年度の日本エッセイスト・クラブ賞のご推薦は会員による推薦作品三〇点、出版社の推薦作品一一点、自費出版二点、合計一四四点でした。

審査基準

- 一、二〇一八年四月一日より、二〇一九年三月三十一日までの間に、初版として出版された書籍とする。
- 二、クラブの正会員（個人会員）の作品、および共同著作は原則として審査の対象としない。ただし、入会の翌年度から五年以内に発表した作品は審査の対象とする。
- 三、著者の国籍は問わないが、日本語で書かれたもの。（翻訳は不可）
- 四、新聞、雑誌等に掲載され、その後出版されたものでもよい。
- 五、他の類似の賞を最近受賞されている方、およびすでに文名を広く知られている方の作品は除く。
- 六、随想、評論、ノンフィクション、伝記、研究、ドキュメント、旅行記など、エッセーを広い範囲でとらえ、特に新鮮で感銘を覚える新人の発掘に努める。

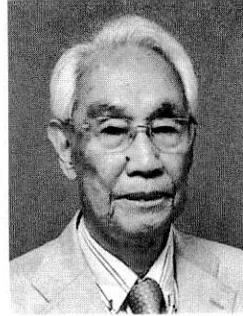
第六十七回日本エッセイスト・クラブ賞
審査委員長 高村 壽一

例会
2018. 9. 19

童謡百年―野口雨情の生家を尋ねて

ゲスト

秋田 博氏（会員）



さる七月一日の「童謡の日」は、日本で初めて童謡・童話の専門雑誌『赤い鳥』が大正七年に発刊されて百周年といわれ、全国で多彩の催しがあつた。私の出身地山口県の柳井市でも上関町有志と協力して六月十四日、野口雨情の直孫野口不二子さん（75歳）を迎えて、「童謡詩人野口雨情の名曲を歌う会」が開かれた。この音楽交流は、地元新聞メディアの協力で、地域的话题をさらった。

きっかけは、さる三月に茨城県北茨城市磯原にある雨情生家資料館代表の不二子さんを尋ねたことだ。当クラブ同人で茨城県の「いばらき大使」を務める深尾凱子さんが、不二子さんと昵懇の間柄ゆえ幹旋、紹介され、同人森脇逸男、中村政雄さんを誘って四人旅となつた。

さつそく深尾さんの手配で案内資料が手元に届いた。それによると、生家の磯原がある北茨城市は、「天心が想い、大観が描き、雨情が詠う」というキャッチ・コピーの観光文化都市なのである。三月二十九日、四人は胸躍らせて常磐線JR磯原駅に着き、不二子さんのお迎えをうけた。最初の日は、不二子さん運転の案内で天心の五浦六角堂や天心記念美

術館を見学し、夜は五浦観光ホテルの旧大観荘の画室に一泊、付近は太平洋日の出の大作『海嘯』そっくりの絶景に、目を奪われた。

翌三十日朝、待望の磯原へ。雨情生家の「観海亭」に着いた。三・一一の東日本大震災のさい、館には1・5メートルの津波が押し寄せ、床上浸水で家の土台が曲がり傾いた、と生々しい記録に驚く。

当日、不二子さんは、胸騒ぎがして一階の雨情の手紙や掛け軸など資料を箱階段の二階に、運び上げて助かった、という。雨情が生まれた「観海亭」は、かねて県指定文化財なので、行政の支援で五年前に震災復興し、今は見学がかなうようになった。

震災後、ベストセラーの名作『野口雨情伝』を書き記した不二子さんは「雨情の歌を通じて、日本文化を次世代につなぐことが私の役目」と語っている。雨情の心を未来に引き継ぐために創つた「野口雨情生家資料館」では、野口家の歴史を教えられた。野口家が楠木正成を宗家とす

る南朝の遺臣・弟正季がルーツであること。幕末に雨情の祖父勝章が尊王攘夷で殉死し、弟西丸帯刀が長州の桂小五郎（木戸孝允）らと「成破の血盟」を結び明治維新の扉を開いた、あの西丸帯刀が雨情の大伯父だったのにびっくり仰天した。

雨情は明治十五年五月、この「観海亭」で父量平、テルの長男として生まれた。家は代々回船問屋で父は村長だった。「観海亭」は元、水戸藩主巡遊のさいの休息所だったが、楠木の家系故に、広大な山林と共に下賜され、二代藩主光圀が命名した。

十五歳になった雨情は上京し、衆議院議員だった伯父野口勝一（北巖）の家から中学に通い、東京専門学校の英文科へ入学した。評論家で劇作家、『小説真髓』等で知られた坪内逍遙の薫陶を受けた。詩人はわかり易い言葉で、地味に謙虚に」と教わり、座敷の上の詩作りではなく、万葉の歌のように土の上の人々の心、土の臭う民謡から童謡へ、と詩人の道を示した。「ローカルの歌や短編を試みて

は」という坪内の教えどおり、雨情は、その土地に合った七、七、七、五の「二十六字詩形」の民謡こそが「土地の民心と握手できる」として全国の間村に歌を残した。

昭和十五年五月、雨情が柳井に來ての作詩「大師山から日に幾度も誰が撞くやら鐘が鳴る」も、上関とんでん節の「東山から夜毎に月は松の上から瀬戸のぞく」も、みな「二十六字詩形」の民謡小唄である。今はその唄や踊りが、それぞれの土地の文化として根付いている。不二子さんは、今回上関町の旧回船問屋加納邸に残る雨情が作詞した部屋から瀬戸を見渡し「ここには文化がある」と喜ばれた。回船問屋の造りにも共感された。

不二子さんは、著書『野口雨情伝』のサブタイトルに「郷愁と童心の詩人」と付けてあるが文字通り、童心の真髓「天から与えられた心の宝」を伝える努力に寧日無しだ。

名家に生まれた詩人雨情は、家督を長男雅夫と妻ヒロに譲った。その

時の苦惱、その苦しみを童謡に詠った。名曲「シャボン玉」も、「七つの子」も、名家を守ろうとする心の葛藤、家族への愛情を童謡という「文徳」に置き換え、芸術の域へ高めた。童謡三大詩人北原白秋、西条八十と並ぶ一人として、日本文化の発展に寄与した真に尊い人生といえよう。そのことを教えられた柳井での音楽交流に参加した人々は、心に染みる不二子さんの歌に感動したのだった。

あきた・ひろし 一九三二年山口県生まれ。早大政経卒。読売新聞調査研究本部主任研究員、同本部次長。退任後「東京テクノフォーラム21」を創出、ゴールド・メダル賞を設定、再生医療の奈良先端科学技術大学院大学教授山中伸弥氏は第十回受賞者（のちノーベル賞受賞）。著書に『凜の人井上準之助』、『海の昭和史―有吉義弥がみた日本海運』、『海防僧月性―明治維新を展いた男』など。



旧盆で石垣島に帰郷しました。数年ぶりにみる郷土は観光地に変身し、内外の観光客で賑わう。発展を喜ばしく思う反面、往時の閑静な佇まいはなく、今浦島の感ひとしおでした。

(長田 亮一)

仙台開府以来四百六十年続いた家を相続税高騰などで処分することとなった。大腿骨骨折のため直接行くことが叶わず、東京在住の長男が勤務の合い間に十数回往復して処分してくれた。

武具飾るこれが最後か家じまい
 廃園に拾ふ人なき落ちた栗

(中名生正昭)

十月にエッセイ教室をはじめたら、大好評。市の通年講座に。クラブ発行のエッセイ集、モンテ・ニユ

のエッセーなど、今頃になって熟読しています。

(今野 耕作)

来年は九十歳とは。我ながらびっくり！でも、仕事への意欲は不変。『歳のことなど忘れなさい。』(出版芸術社)の次の作品を書いたり、教えたり、忙しい毎日を送っています。

(加藤 恭子)



私と中山士朗さんの、知の木々舎ブログでとり交わしている書簡の2016年夏から2018年夏までを近く本にします。2012年と2016年までの書簡はヒロシマ往復書簡ⅠとⅢ集として出版しましたが、Ⅲ集のあとがきで、資金もつき、本にするのはこれで終わり書きまし

た。この間、中山さんはガン発症、原爆の「医療特別手当」を受けることになりました。この金をつかい2016年夏以降の書簡をまとめることにしたので。なお、ブログでのやりとりはまだつづいています。ヒバクシャは死ぬまで書きつづけないればなりません、核兵器廃絶の日まで。

(関 千枝子)

脊椎手術後一年余、今度は自宅で転び胸骨骨折。寝起き難儀で書斎に電動ベッドを入れたら、震度7の胆振地震で頭の上に本がどさどさ。危うく逃れて無事。和室に寝て余震の揺れにも慣れました。(若林 滋)

— 研究のまとめをつけようと思ひ、『山口仲美著作集』(全八巻・風間書房)を刊行することに。十月には著作集巻一『言葉から迫る平安文学1 源氏物語』巻二『言葉から迫る平安文学2 仮名作品』を刊行。

(山口 仲美)

自分の老化のスピードに、日々、呆然としています。呂律が回らない。まっすぐ歩けない。排泄がままなら

ない。おのずと「引きこもり」がちですが、読む、書く、飲む、食う欲は健在です。

(井口 隆史)

賞をいただいたお蔭で、懐かしい人たちの再会が叶いました。それから、講演をいくつか頼まれました。集客とネタ切れを心配しつつ、父親譲りの話し下手ですが奮闘中です。

(内藤 啓子)

10月より、サッカー監督の現場を離れ、故郷韭崎生活が始まりました。内なる自分を見つめ、また出直します。ん——、空気が美味しいノ

(羽中田 昌)

11月14日付けで「平成30年度大日本農会緑白綬有功章」(総裁・秋篠宮文仁親王殿下)を授かりました。在米40年余、こつこつとランドスケープ・ガーデンングをしながらアメリカの大学に通い、沖縄県の最大新聞・琉球新報のロサンゼルス通信員を20年間以上続け、13000もの記事や現在続行のコラムを書き続け、日米友好親善に貢献したことが表彰に繋がった。

(当銘 貞夫)

自著紹介

(順不同)

『明治維新の夜明け前』

小千谷談判』

広井忠男著

平成三〇年は戊辰戦争、明治維新の一五〇周年にあたる。北越(越後)戊辰戦争は長岡城攻防をはじめ全県に及んで激戦を極めた。その直前に縮布で知られた小千谷で新政府軍代表と長岡藩家老河井継之助の政治交渉、小千谷談判が行われた。これは成立しない性格のものであった。司馬遼太郎の小説「峠」で一躍有名になった。河井が無謀な開戦に及ばなければ長岡は今日新潟県の県都、県庁所在地になって発展していたと結論づけている。無理が多く結束もバラバラの奥羽越列藩同盟軍の敗北を探る。NHK大河ドラマ「西郷どん」の年に再考したい。

(日本海企画社 1600円税込)



『北前船寄港地ガイド』

加藤貞仁著

江戸中期から明治三十年代まで、大阪と北海道を日本海回りで結んでいた商船群があった。単なる輸送船ではない。寄港地で安いと思う物があれば買い込み、逆に高く売れる積荷があれば売りながら航海する、いわば「動く総合商社」だった。

このほど全国の関係四十七市町が文化庁の「日本遺産・北前船寄港地と船主集落」に認定された。これを機に、2002年に出した『北前船寄港地と交易の物語』を大幅に書き直したのが本書である。夢を抱いて荒海へ乗り出した男たちの気概と、

北前船の歴史遺産を知ってほしい。

(無明舎出版 1900円+税)



『海防僧 月性』

— 明治維新を展いた男 —

秋田 博著

昨今の書店歴史コーナーに、『明治維新は無い、嘘だ』とか、『吉田松陰のテロが日本を滅ぼした』、また『呪われた明治維新』といった「稗史」が並んでいる。町に伝わる民情報告史のような巷談話では、明治維新の意味は分からない。歴史は過去と現在の対話であり、神代から古墳時代、古代、中世、近世、近代と地続きの物語である。幕末の僧侶で志士、志士にして秀れた詩人の生涯を通して、「近世の奇跡」とも言われる明治

維新の意味を聞いてみた。西欧列強文明侵略に打ち勝つための政治的な日本民族の智慧だった。

(人文書館 3000円+税)



事務局から

新会員推薦のお願い

会員一名の推薦でも審査

日本エッセイスト・クラブの新会員をご推薦ください。

クラブ定款第7条にありますように、正会員となるには、現在の正会員二名以上の推薦を得て、理事会の承認を求めることになっています。

この「二名以上の推薦」という原則は変わりませんが、会員一名の推薦でも、理事会に申請していただければ、審査の対象とします。理事会推薦によって、規約の要件は十分に満たすことができます。

エッセイストの意味合いについては、狭義の随筆や随想だけにとらわれず、評論、ノンフィクションなど幅広い分野を対象にしています。著書や新聞・雑誌などのお仕事を参考に、クラブの趣旨に則して、理事会で審査します。

クラブの活動は、クラブ賞の選定のほか、年三回の会報発行、ゲストを招いての例会開催などがあります。十月末現在の正会員は三〇五名です。クラブの一層の活性化を図りたい、会員各位の新会員ご推薦をお願いいたします。

正会員の年会費は一万五千元。入会金は不要。推薦、入会手続き等は事務局にお問い合わせください。(日本エッセイスト・クラブ理事会)

特別維持会費ご寄付のお礼

十月末日までに、次の方々からご寄付をいただきました。ご芳志のほど、心からお礼申し上げます。

(順不同・敬称略)

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|
| 松本 仁一 | 望月 照彦 | 杉山 武子 | 秋岡 伸彦 | 八木 恭平 | 柳澤 桂子 | 森本 貞子 | 小曾戸明子 | 内藤 啓子 | 河合 弘之 | 原田 國男 | 降幡 賢一 | 大井 玄 | 萬年 浩雄 | 金子 光美 | 大槻 茂 | 安嶋 明 | 出久根達郎 | 太田 愛人 | 栗生 将信 | 和田 亮介 | 藤原 作弥 | 吉野源太郎 | 中名生正昭 | 中島誠之助 | 海老沢小百合 | 中村 龍介 | 甘里 君香 | 戸田 淳子 | 今野 耕作 | 倉部 行雄 | 村山 正則 | 河村 幹夫 | 高島 肇久 | 齋藤健次郎 | 碓井 彊 | 穂苺 正臣 | 秋山 秀一 |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|-------|------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|
| 福嶋 武 | 稲畑 汀子 | 杉江 弘 | 古川 洽次 | 佐藤 幸子 | 大宅 映子 | 森 武生 | 加藤 恭子 | 関 千枝子 | 広井 忠男 | 遠藤 利男 | 紺野 猷邦 | 島山 重篤 | 森本 雍子 | 中村 政雄 | 吉行 和子 | 道脇 弘俊 | 島崎 保彦 | 栗山 定幸 | 藤原 勇彦 | 富永 孝子 | 渡辺 祥子 | 蜷川 真夫 | 齋藤 健 | 深尾 凱子 |
|------|-------|------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|

会員からの寄贈著書

- | | | | | |
|-------------------------|-------------------|-------------------------|---------------------------------|--------------------------|
| 佐保田芳訓氏著「佐藤佐太郎の作歌手帳」いりの舎 | 榎本好宏氏著「句集 青簾」角川書店 | 齋藤健次郎氏著「エッセイ集 伊勢原散歩」私家版 | 山口仲美氏著 卷一「言葉から迫る 平安文学1源氏物語」風間書房 | 卷二「言葉から迫る 平安文学2仮名作品」風間書房 |
|-------------------------|-------------------|-------------------------|---------------------------------|--------------------------|

平成三十年度理事会報告

第二回理事会(30年11月1日)

- ・ 会員の現況報告
- ・ 平成三十年度上半期収支報告
- ・ 次号会報について

「自著紹介」のお願い

刊行から概ね一年以内を目安に、ご著書の紹介を事務局あてに随時、郵送、FAX、メール等でご送稿ください。本文は著者名、書名は別にして250字程度。本文とは別に出版社・価格を付記願います。

☆クラブ室をご利用ください

会員または会員の関係する団体、グループに限りです。
 利用料金は、二時間三千円。
 超過料金は、一時間につき千円です。
 詳細は事務局まで。

☎ 03-3502-7287

一般社団法人日本エッセイスト・クラブ定款

(抜粋)

第1章 総 則

(名称)

第1条 この法人は、一般社団法人日本エッセイスト・クラブと称する。

(目的)

第3条 当法人は、エッセイストの親睦をはかり、共通の利益を擁護し、言論の自由を主張し、文化と平和に貢献することを目的とし、国際文化団体との連携を期する。

(事業)

第4条 当法人は前条の目的を達するために下記の事業を行う。

1. 会員の相互協力
2. 国際文化交流
3. 研究調査の発表並びに講演、見学
4. 会員相互の親睦と相互扶助
5. クラブ賞の選定、その他必要な一切の事業

第2章 会 員

(種別)

第6条 当法人の会員は、次の5種とし、正会員をもって一般社団法人及び一般財団法人に関する法律(以下「一般法人法」

という。)上の社員とする。

- (1) 正会員 当法人の目的に賛同して入会した個人
- (2) 法人会員 当法人の目的に賛同して入会した法人
- (3) 賛助会員 当法人の事業を賛助するため入会した個人又は団体
- (4) 名誉会員 当法人に特に功労があり、理事会で推薦され、会員総会で承認された者
- (5) 特別会員 当法人の正会員として20年以上継続した者又は当法人が主催するクラブ賞を受賞した者が満85歳になったとき

(入会)

第7条 正会員として入会しようとする者は、正会員2名以上の推薦を得、申込書に会費を添えて理事会の承認を受けなければならぬ。法人会員、賛助会員は理事会が推薦する。

第3章 会員総会

(構成)

第13条 会員総会は、すべての正会員をもって構成する。

2 前項の会員総会をもって一般法人法上の社員総会とする。

(会員総会)

第14条 当法人の会員総会は、定時会員総会及び臨時会員総会とし、定時会員総会は、毎事業年度の終了後3か月以内に開催し、臨時会員総会は必要に応じて開催する。全会員の5分の1以上が書面により請求したとき、または理事会が会議の目的事項を示して請求したときは、会長は臨時総会を招集し

なければならぬ。

第4章 役員等

(員数)

第20条

当法人に次の役員を置く。

- (1) 理事 15名以上25名以内
 - (2) 監事 2名以上
- 2 理事のうち、会長1名、理事長1名、専務理事1名、常務理事若干名、事務局長1名を推薦して理事会の決議によつて、理事の中から定める。
- 3 会長及び理事長は、当法人を代表し、一般法人法上の代表理事とする。

第5章 理事会

(権限)

第28条

理事会は、次の職務を行う。

- (1) 当法人の業務執行の決定
- (2) 理事の職務の執行の監督
- (3) 会長、理事長、専務理事及び常務理事の選定及び解職

第6章 計 算 (略)

第7章 清 算 (略)

第8章 附 則 (略)

役員名簿

会 長	村尾清一		
理 事 長	遠藤利男		
専務理事	(空 席)		
常務理事	太田愛人	栗田 亘	森脇逸男
理 事	秋岡伸彦	井上卓衛	森永公紀
	高村壽一	深尾凱子	藤原房子
	降幡賢一	松尾文夫	よしだみどり
監 事	碓井 彊	出中洋之助	藤原作弥
事務局長(兼)	秋岡伸彦		

会 員 名

(2018年10月末現在 305名)

五十音順

あ行

阿川 佐和子	阿部 菜穂子	青木 賢児	秋尾 沙戸子	秋岡 伸彦
秋田 博	秋山 秀一	芥川 喜好	浅川 港	甘里 君香
荒井 保男	足立 則夫	荒木 裕志	有馬 真喜子	五十嵐 佳子
井口 隆史	井上 卓衛	池内 紀昭	池谷 薫	伊藤 光彦
伊野 啓三郎	飯塚 恆雄	飯塚 浩彦	石崎 孟	石原 美光
市田 隆文	稲畑 汀子	猪熊 建夫	上田 篤	上田 良一
上野 創	白井 和恵	白田 信行	鶴飼 哲夫	碓井 彊
内田 洋子	梅津 時比古	海老沢 小百合	榎本 好宏	遠藤 利男
小川 津根子	小倉 薫子	小澤 秀雄	小塩 節	小曾 戸明子
尾崎 左永子	尾崎 俊介	及川 直志	大井 玄	大塚 義治
大岩 孝平	大城 浩詩	大空 博	大平 常元	大高 英昭
大谷 克弥	大槻 茂	大村 智	大宅 映子	太田 愛人
岡 佳津子	岡島 成行	岡川 直敏	岡本 厚	奥山 俊宏

か行

加藤 恭子	加藤 貞仁	柏 澄子	片野 博司	勝方 信一
金森 敦子	金子 光美	亀田 泰武	河合 弘之	川田 志明
川良 浩和	河村 幹夫	木田 幸紀	北原 歌子	城山 邦紀
儀同 保	菊澤 研一	岸 恵子	岸本 康	北野 栄三
久我 なつみ	久谷 與四郎	轡川 隆史	国正 武重	倉部 行雄
倉本 宗剛	栗生 将信	栗田 亘	栗山 定幸	黒川 鍾信
古庄 ゆき子	小池 光	小谷 瑞穂子	小林 和男	小松 浩
児島 宏子	後藤 多聞	後藤 秀機	今野 耕作	紺野 猷邦

さ行

佐々木 健一	佐々木 満里子	佐田 智子	佐藤 きむ	佐藤 幸子
佐橋 慶女	佐保田 芳訓	斎藤 勇	齋藤 健	齋藤 健次郎
齋藤 博康	柴門 ふみ	坂口 和子	坂本 弘道	澤口 たまみ
澤地 久枝	澤藤 範次郎	三宮 麻由子	志村 ふくみ	塩谷 靖子
篠田 桃紅	柴田 鉄治	島崎 保彦	下重 暁子	下村 満子
菅 康弘	杉江 弘	杉溪 一言	杉戸 大作	杉山 武子
鈴木 博	砂原 和雄	関 千枝子	関戸 祐守	

た行

田熊 清彦	田中 充子	田中トモミ	田中 伸尚	田中 秀一
田中 實	田中洋之助	田沼 敦子	田村 秀敏	田谷 麗子
田和 潤子	高木 徹	高榎 堯	高階 經和	高島 肇久
高橋 祥友	高村 壽一	竹内 一正	竹中 淑子	武内 寛
武田 信二	武本 宏一	谷地 快一	玉城 政嗣	俵 万智
栢野 健次	辻 由美	堤 未果	鶴ヶ谷真一	D・ゾペティ
出久根達郎	戸田 桂太	戸田 淳子	鳥羽欽一郎	東畑 朝子
当銘 貞夫	徳田 正幸	富永 孝子	富山 和子	鳥海 修

な行

内藤 啓子	内藤 洋子	中井 幸一	中島さおり	中島誠之助
中野 利子	中名生正昭	中丸 美繪	中村登紀夫	中村 政雄
中村 龍介	中山 士朗	永井 梓	長井 好弘	長田 亮一
長友佐波子	長屋 龍人	鍋島 高明	並木きょう子	新妻 義輔
二宮 正之	蛭川 真夫	縫田 暉子	野見山曉治	

は行

葉山美知子	長谷川慶太郎	羽中田 昌	畑 正憲	畠山 重篤
濱邊 祐一	原 彬久	原田 國男	林 望	春原 昭彦
早河 洋	樋口 恵子	広井 忠男	深尾 凱子	福嶋 武
福田 章	福田はるか	福原 義春	藤原 勇彦	藤原 作弥
藤原 房子	藤原 正彦	降幡 賢一	古川 洽次	古川 浩
別役 実	穂苅 正臣	細川 俊夫	堀 文子	堀内 丸恵
堀尾真紀子				

ま行

牧 久	巻口 勇次	牧村健一郎	又吉 國雄	町田 邦雄
松尾 文夫	松田 宣子	松原 眞樹	松村満美子	松本 仁一
松山 幸雄	萬年 浩雄	三島 利徳	水谷 亨	道川 文夫
道脇 弘俊	南 砂	宮本 倫好	宮崎佳代子	村尾 清一
村松 賢一	村山 正則	望月 照彦	桃井 恒和	森 小夜子
森 孝之	森 武生	森 哲志	森 美可	森永 公紀
森本 貞子	森本 雍子	森元喜美雄	森脇 逸男	

や行

八百板洋子	八木 恭平	八木 美雄	矢吹 清人	安嶋 明
-------	-------	-------	-------	------

柳 博雄	柳生 尚志	柳澤嘉一郎	柳澤 桂子	柳川 時夫
山川 静夫	山形 孝夫	山岸 健	山口 寿一	山口 仲美
山下 健	山藤 章二	山室 寛之	山本 一生	山本思外里
山本 博文	よしだみどり	養老 孟司	横山 昭作	吉沢 久子
吉野源太郎	吉原 賢二	吉行 和子		

わ行

和田 亮介	若林 滋	脇 祐三	渡瀬 昌彦	渡辺 祥子
渡辺 綱纒	渡辺 雅隆	渡辺美佐子	渡邊 満子	

法人会員（順不同）

朝日新聞社	岩波書店
毎日新聞社	講談社
読売新聞社	NHK 出版
産業経済新聞社	KADOKAWA
日本経済新聞社	集英社
中日新聞社	マガジンハウス
共同通信社	日本民放クラブ
日本放送協会	
TBS テレビ	
テレビ朝日	

日本エッセイスト・クラブ事務局



日本エッセイスト・クラブ

会報 二〇一八冬 (No.70Ⅱ)

二〇一八年十一月二十九日 発行

発行人 村尾清一

発行所 一般社団法人 日本エッセイスト・クラブ

東京都港区新橋一―一八―一

明宏ビル別館六階 一〇五―一〇〇〇四

電話 〇三(三)五〇二七二八七

FAX 〇三(三)五〇二七二八八

ホームページ <http://essayistclub.jp/>

Eメール info@essayistclub.jp

印刷所 (株)TBSサービス

古今東西の名著、その核心を読み解く——。大好評の愛蔵版！

NHK「100分de名著」ブックス

対談、特別寄稿、資料、写真などを追加収録！ 定価各1,080円(税込) *各四六判 並製

宮沢賢治

銀河鉄道の夜

ロジャー・パールバース

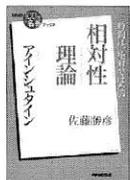
ほんとうにいいことをしたら
いちばん辛いんだ——。



アインシュタイン 相対性理論

佐藤勝彦

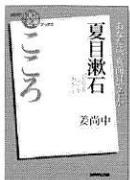
時間は、絶対ではない。



夏目漱石 こころ

姜尚中

あなたは腹の底から
真面目ですか。



万葉集

佐佐木幸綱

はじめにうた
和歌があった



紫式部 源氏物語

三田村雅子

想いは、伝わるか。



- | | | | |
|------------------|-------|----------------|-------|
| ドラッカー マネジメント | 上田惇生 | 古事記 | 三浦佑之 |
| 孔子 論語 | 佐久 協 | 松尾芭蕉 おくのほそ道 | 長谷川 權 |
| ニーチェ ツァラトゥストラ | 西 研 | 世阿弥 風姿花伝 | 土屋恵一郎 |
| 福沢諭吉 学問のすゝめ | 齋藤 孝 | 清少納言 枕草子 | 山口仲美 |
| アラン 幸福論 | 合田正人 | 柳田国男 遠野物語 | 石井正己 |
| ブッダ 真理のことば | 佐々木 閑 | ブッダ 最期のことば | 佐々木 閑 |
| マキャベリ 君主論 | 武田 好 | 莊子 | 玄侑宗久 |
| 兼好法師 徒然草 | 荻野文子 | 岡倉天心 茶の本 | 大久保喬樹 |
| 新渡戸稲造 武士道 | 山本博文 | 小泉八雲 日本の面影 | 池田雅之 |
| バスカル パンセ | 鹿島 茂 | 良寛詩歌集 | 中野東禪 |
| 鴨長明 方丈記 | 小林一彦 | ルソー エミール | 西 研 |
| フランクル 夜と霧 | 諸富祥彦 | 内村鑑三 代表的日本人 | 若松英輔 |
| サン＝テグジュペリ 星の王子さま | 水本弘文 | アドラー 人生の意味の心理学 | 岸見一郎 |
| 般若心経 | 佐々木 閑 | | |

ne
CLUB